

令和4年度 第5回考古学講座

古代相模の須恵器と流通

南足柄市市民部文化スポーツ課 寺岡 裕子

令和4年12月17日（土）

【目次】

1. はじめに
2. 須恵器とは
3. 古代相模での須恵器
4. 古代相模出土の特徴的な須恵器
5. おわりに

1. はじめに

原始古代の日本を象徴する焼き物はいくつかあり、縄文時代の「縄文土器」、弥生時代の「弥生土器」は皆さんも目にしたこと、耳にしたことがあるのではないのでしょうか。では、古墳時代を象徴する焼き物が何かといえば、「須恵器」と「土師器」と呼ばれる二つの焼き物です。今回取り上げるのはそのうちの「須恵器」になります。

日本考古学において土器は遺跡の年代推定の重要な要素です。「須恵器」も古墳時代から奈良・平安時代にかけての全国各地の遺跡から出土することから、年代推定の判断材料の一つとなっています。しかし、華やかで躍動的な文様が施された縄文土器等と比較すると、「須恵器」とはどのようなものなのか、どこに着目して観察したらよいのかといった基本的な事柄も含め、あまり知られていないのではないかと思います。そこで、本講では古墳時代以降の考古学研究に多大な影響を与えている「須恵器」について、その概略と古代相模での様相について解説していきたいと思います。

2. 須恵器とは

(1) 古墳時代の「新しい」焼き物

須恵器は焼き物の分類では「陶質土器」に区分されます。焼き物は、材料や焼成温度、窯の有無によって種類が分けられています。焼成温度の観点からみると、800℃前後が「土器」、1100℃前後が「陶質土器」、1200℃前後が「陶器」、1250℃以上が「磁器」とされます。

須恵器は、古墳時代(5世紀半ば～後半)に朝鮮半島から製作技法と工人が日本に渡来し、国内生産が開始されました。

須恵器の特徴としては、色は灰色(青灰色)を帯び、縄文土器等と比較すると硬く焼きしまっており、保水性に優れているところです。反面、耐熱性はあまり高くありません。

須恵器がそれまでの焼き物と異なった点は、本格的な構築窯で焼成された焼き物であったことにあります。縄文土器等に代表される原始古代の焼き物は、主に野焼きで焼成されており、基本的な製法は古墳時代になっても大きな変化はありませんでした。窯というまったく新しい要素が加わって作られた須恵器は、古墳時代の人々にとっては新しく珍しい焼き物だったのです。

須恵器の硬質性は、窯を用いた高温焼成によりもたらされており、その色も窯での焼成が影響しています。焼成段階でいったん窯を密閉させ、酸素供給を断った還元焰を行うことで、胎土中の鉄分に含まれる酸素が消費され、器の色が灰色(青灰色)になるのです。また、窯内が高温になることで、しばしば器の表面や降りかかった灰がとけ、緑色の自然釉がつく場合もありました。

須恵器の製作には窯とともに轆轤ろくろも導入され、この新しい技法は土師器の製作技法としても取り入れられていきました。

(2) 須恵器の名称

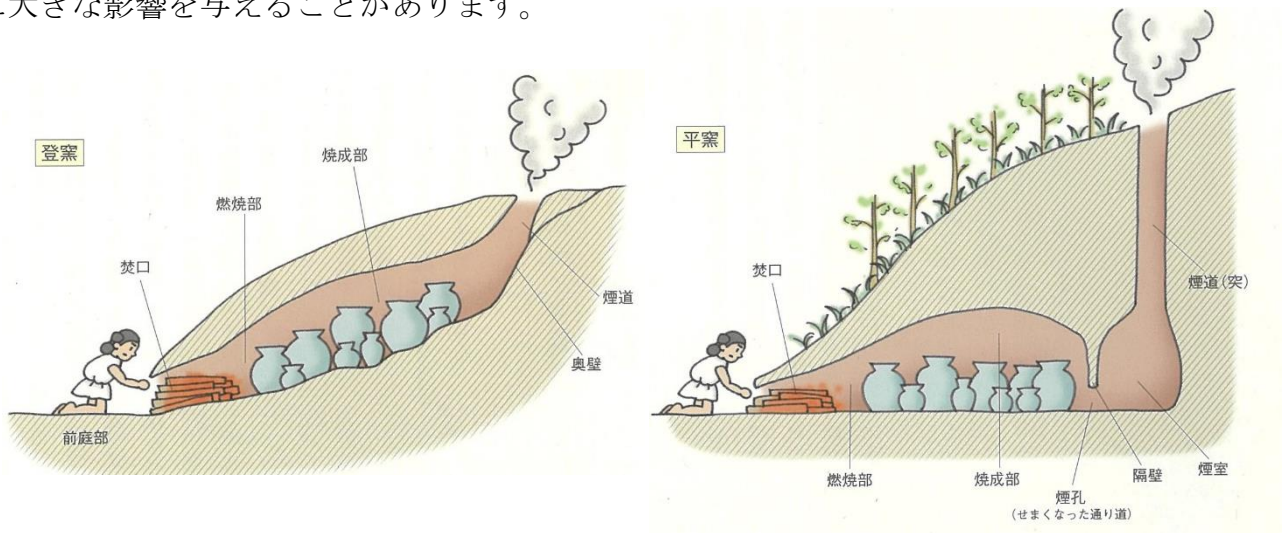
江戸時代には「行基焼ぎょうきやき」「勾玉壺まがたまづぼ」と呼称され、明治時代には「祝部土器はふりべ」「齋瓮いらいべ」「朝鮮式土器」「陶質土器」などの呼称が、研究者ごとに自由に用いられていました。「須恵器」の呼称は昭和初期、考古学者の後藤守一氏が提唱したことに始まります。後藤氏は、古代の文献には「陶器」の字をあて、「須恵宇都波毛乃すえうつわもの」と呼んで(『和妙抄』)いたこと、「陶器すえき」は一般に使われる陶器と混同しやすいことから、「陶」を「須恵」の二字に分ける呼称を提唱しました。「須恵器」の用語は戦後の日本考古学の発展とともに定着していきました。

(3) 須恵器の生産

須恵器の生産に用いられたのは^{あな}窟窯であり、構造面では、丘陵斜面の傾斜をそのまま利用した登窯と、丘陵斜面に対して平行に床面が構築された平窯の二種類があります。

両窯とも焚口・燃烧部・焼成部・煙道が構造上、共通しています。登窯は、製品を置く床面に傾斜があることから、床面を段状にしたり、甕片や砂床を利用した置台を配置して製品の安定性を確保していました。平窯は、隔壁から煙道までの構造が登窯と異なっており、隔壁に煙孔を設け、そこを通った煙が煙室に溜められたのち、煙道から外部に排出されました。

須恵器生産窯の近くでは、失敗作等が廃棄された場所（灰原）や、窯跡内から土器がそのまま発見されることがあります。それら当時の失敗品等から、須恵器の時代差（相対年代）や窯入れ時の状況を判断できることがあります。特に灰原からの出土品は、須恵器編年研究に大きな影響を与えることがあります。



須恵器窯の構造(中村浩 2006『泉北丘陵に広がる須恵器窯 陶邑遺跡群』)

(4) 須恵器の器種

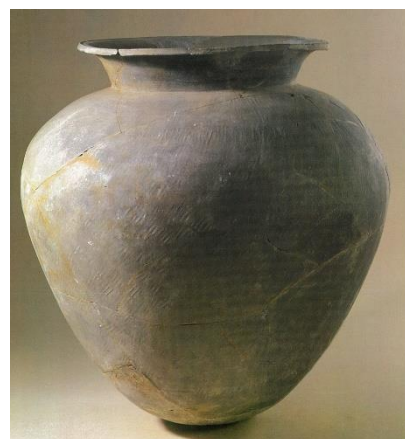
器は用途によって最も機能的な形で作られており、主に貯蔵・供膳・煮沸の三つの用途を人類は求めてきました。複数の用途を満たすもの、三つの用途に当てはまらない器もありますが、ここでは貯蔵・供膳・煮沸の三つの用途に基づき、須恵器の代表的な器種を紹介します。また、器各部の名称についても解説します。

※本項での使用写真は特に記載ない場合は、田辺昭三 1975『陶磁体系』第4巻須恵器から転用しています。

①貯蔵用の須恵器

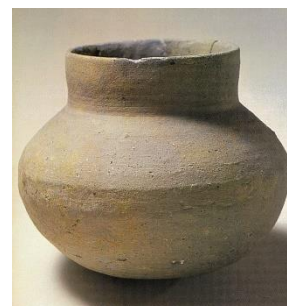
【甕】

須恵器の伝来当初、最も多く生産されており、初期段階における主要用途が貯蔵であった証と言えます。初期段階では大型の甕が多いですが、時期が経つごとに小型化していきます。体部の肩に把手を伴うものがあり、紐を通して蓋を固定していたと推測されています。口縁部や体部の文様、胴部の長さにより時期的な変化が追えます。



【壺】

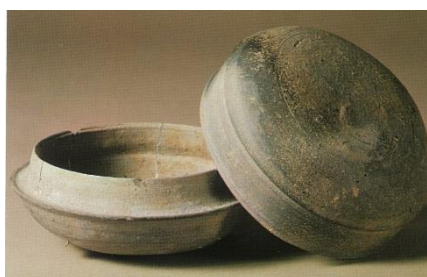
貯蔵が主要用途とされますが、小型のものは供膳用としても使用されたと考えられます。大小さまざまな大きさがあり、広く求められた器種だといえます。頸部の長さや口縁部の広さ等により細かく分類され、またそれらが時期的に変化しています。



② 供膳用の須恵器

【杯（蓋杯）】

蓋と杯身から構成される合子状の器種で、蓋と一組で蓋杯と呼称されることもあります。杯身の上部にある蓋受け（たちあがり）の形状・蓋もしくは全体的な形状の変化が追いやすく、また須恵器の登場から消滅まで長期間存在することから、須恵器編年においても、基準的な存在となっています。



【高杯】

杯に脚部が付いた形で、蓋を伴う高杯を有蓋・無蓋と分けています。脚部の透かしの入れ方で、産地や時代の変化が追えます。初期段階から存在し、規模の大小も様々あります。



【器台】

朝鮮半島から伝えられた形態が日本に定着したもので、初期段階では半島産との区別が困難なものもあります。形状は筒型と高杯型があり、初期段階では^{きよし}鋸歯文や組紐文などの文様が見られます。

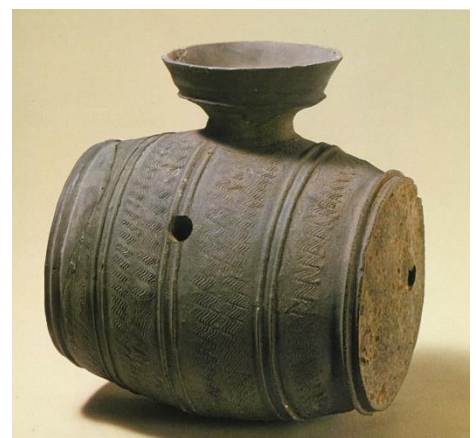


【^{はそう}甗】

壺の体部の一部に小さな穴をうがった特異な形態の壺です。小型の壺型と、樽型あるいは俵型のものがあります。樽型・俵型は初期段階からみられますが、6世紀にはほとんど見られなくなります。小型壺型は初期段階から7世紀まで頸部や胴部などに変化をつけながら存続します。



甗



樽型甗

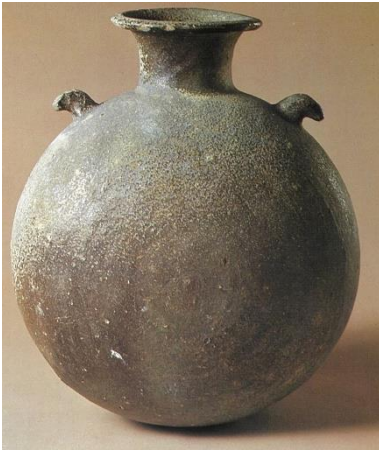
【瓶】

壺の一種ともいえる器種で、形状の違いにより呼び方が異なります。

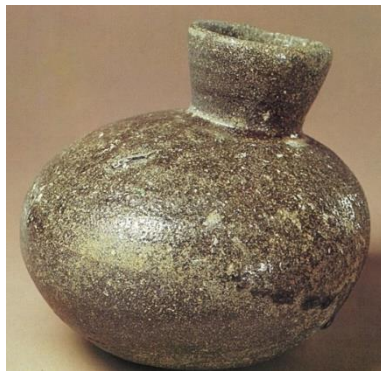
提瓶^{ていへい}は、扁平な太鼓状の体部の側面に口縁部を伴う、水筒のような形状をしています。5世紀段階から作られていたと推測されており、初期段階では肩部に大きな輪上の把手がつきます。把手の変化により、時期的な変遷が追やすい器種です。

平瓶^{へいへい}は、平な円柱形に近い体部の上面の一方に口縁部を伴うものです。提瓶と同様、肩部把手の変化により、時期的な変遷が追やすい器種です。

横瓶は、楕円形に近い体部の上面中央に口縁部を伴うものです。平瓶と比較すると横に長い形をしています。



提瓶



平瓶

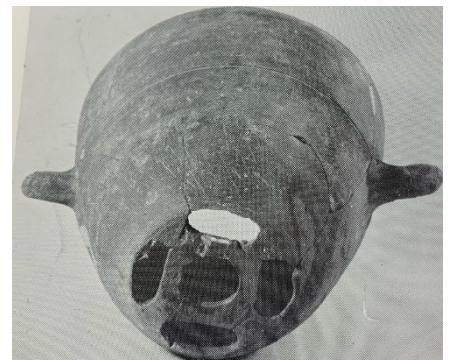
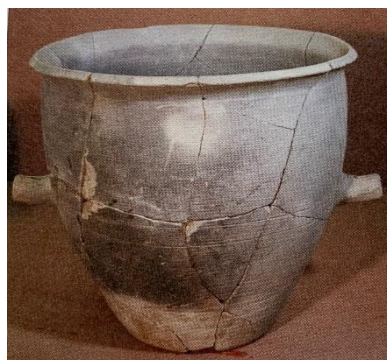


横瓶

③ 煮沸用の須恵器

【甑】

鍋から出る湯気によって穀物などを蒸すために使用されました。鍋にかけられるため、側面に把手が付けられ、湯気の通りをよくするために底部に孔があげられています。



(左のみ：中村浩 2006『泉北丘陵に広がる須恵器窯 陶邑遺跡群』)

【鍋】

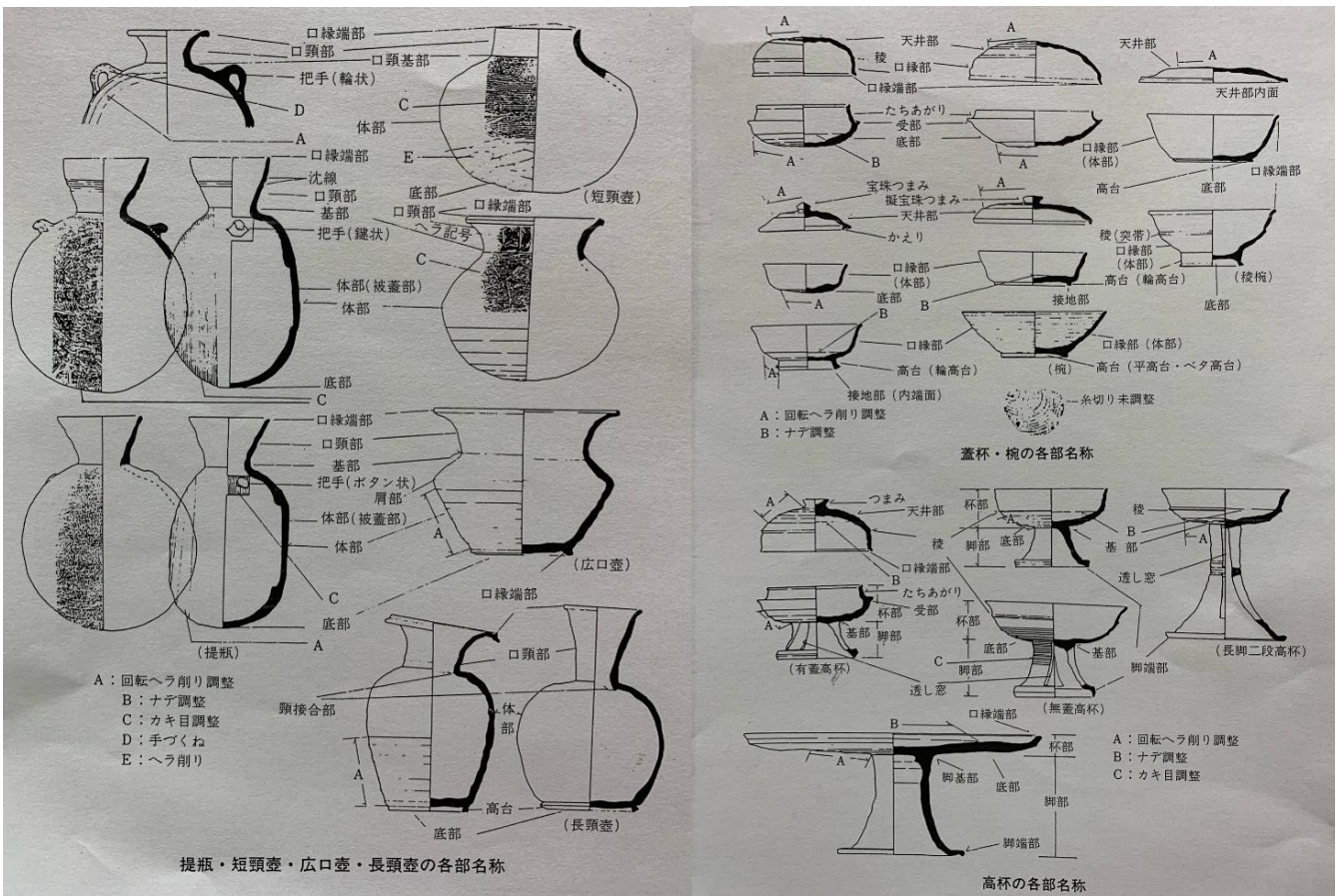
炉にかけ、湯を沸かすために使用されました。内部に甑を重ねて蒸し調理をしたり、食材を入れて煮炊きもしていました。直接火に当たるため、耐熱性の観点から硬質なものはいす。初期段階では須恵器とともに伝来したため、窯跡からも出土しますが、主に土師器がその役割を担いました。

④ その他

材料である粘土の性質を活かし、金属製品や石製品の代用（模倣）品が多く作られました。代表的なものとしては、硯や水瓶が挙げられます。その他、蛸壺などの漁労具なども作られました。いずれも短期的な生産に終わっています。



蛸壺（中村浩 2006『泉北丘陵に広がる須恵器窯 陶邑遺跡群』）



器種の各部名称（中村浩 1990『研究入門 須恵器』）

(5) 須恵器の産地

古墳時代以降、日本各地で生産された須恵器は様々な場所へと供給されました。以下、特に古代相模と関係が深い産地となります。

【大阪府陶邑古窯跡群】

大阪府堺市、和泉市、岸和田市、大阪狭山市にまたがる泉北丘陵に位置する遺跡です。国内最古かつ最大規模の須恵器生産地であり、古墳時代から平安時代にかけて須恵器が生産されました。「陶邑」の名は、『日本書紀』にも見受けられ、遺跡周辺では古くから土器片が採取されていました。昭和36(1961)年以降、泉北ニュータウン建設に伴う発掘調査が実施され、このとき400基以上の窯跡のほか、古墳群や集落跡も確認されました。調査後、東西約10km、南北約6kmの広大な窯業地であったことが判明しました。総数では1000基以上の窯跡があるとされます。

一連の膨大な調査成果をもとにした陶邑の須恵器はおよそ5型式に分けられ、一般に「陶邑編年」と呼称されており、現在でも全国的な須恵器研究の基礎資料となっています。

陶邑窯跡群の出土遺物のうち、5～9世紀に製作され、編年基準となった資料等(2585点)が「大阪府陶邑窯跡群出土品」として、2005年に重要文化財に指定されました。



周辺地図（中村浩 2006『泉北丘陵に広がる須恵器窯陶邑遺跡群』）

型式	段階	蓋	杯身	高杯	瓶	長頸壺	祝	鉢	針	甕
I	1									
	2									
	3									
II	4									
	5									
	1									
	2									
	3									
	4									
III	1									
	2									
	3									
IV	1									
	2									
	3									
	4									
V	1									
	2									

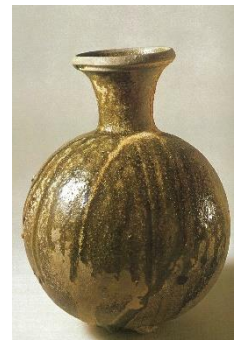
陶邑須恵器の型式編年（中村浩 2006 『泉北丘陵に広がる須恵器窯 陶邑遺跡群』）

【愛知県猿投窯跡群】

愛知県名古屋市東・南部、豊田市西部、瀬戸市南部、刈谷市北部をむすぶ丘陵地帯に位置する遺跡です。5世紀後半から13世紀末ごろまで須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などが生産され、約1000基の窯跡が確認されています。特に灰釉陶器は東国の集落跡で多数出土しており、猿投窯跡産の土器編年は重要な位置を占めています。平安時代から鎌倉時代には日本最大の窯業生産地へと発展しています。

【静岡県湖西窯跡群】

静岡県湖西市から豊橋市東部の丘陵地帯に位置する遺跡です。5世紀末から14世紀末ごろにかけて須恵器等が生産され、1000基近い窯跡があると目されています。飛鳥時代（7世紀前半）から奈良時代（8世紀前半）にかけて最も生産が盛んであり、この時期に湖西窯産須恵器は東国各地、最北端は青森県まで流通していました。特に、先述の猿投窯跡を始め、東海地方で生産された「フラスコ型瓶」は、相模国の横穴墓でも頻繁に出土しています。



フラスコ型瓶（田辺昭三 1975『陶磁体系』第4巻須恵器）

【埼玉県南比企窯跡群】

埼玉県鳩山町、嵐山町・ときがわ町等に位置する遺跡です。6世紀初頭から10世紀前半ごろまで須恵器や瓦が生産されていました。国分寺創建期には須恵器窯を瓦生産窯としても用いていました。南比企産須恵器は埼玉・東京のほか群馬南部、千葉北部、相模東部と広域に流通しており、東日本有数の窯跡とされます。

【東京都南多摩古窯跡群】

東京都町田市、八王子市、多摩市、日野市等にかけて東西17km、南北9km前後に分布する遺跡です。8世紀前半～半ばから10世紀ごろまで須恵器が生産されていました。瓦専用の窯跡が発見されており、武蔵国分寺創建時の瓦生産、瓦屋根では相模国分寺供給瓦が生産されていました。

3. 古代相模での須恵器

全国的にみると、生産体制が整う以前の須恵器は限られた場所でしか出土せず、初期段階では古墳での出土事例がほとんどと言えます。出土事例が増加するのは、各地での生産体制の確立後、主に6世紀以降になってからです。

関東全体でみても同様に、初期段階では搬入品がほとんどであり、短期的な須恵器窯での生産から飛鳥・奈良時代の本格的な生産体制の確立へと移り変わる状況です。

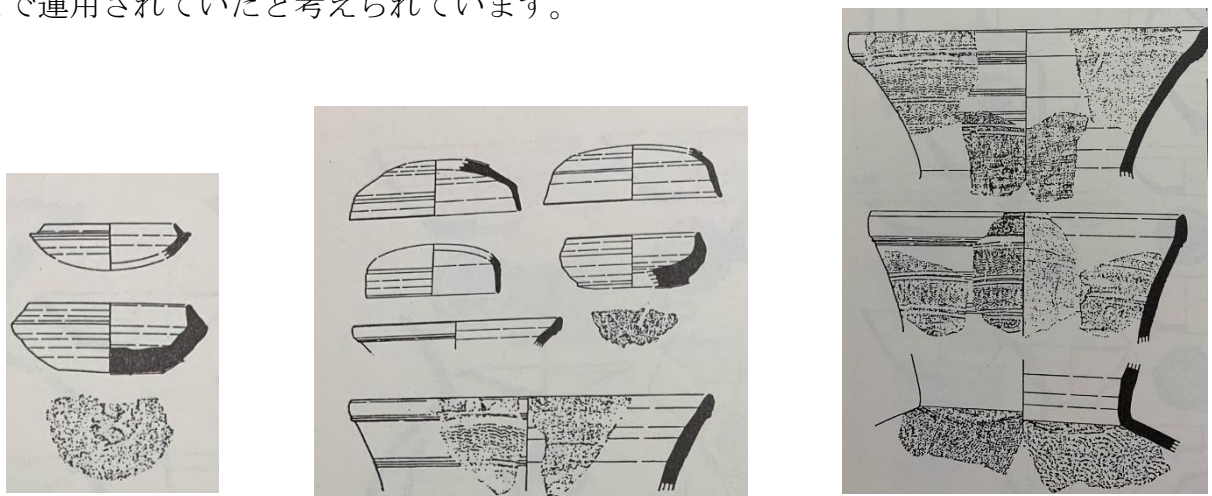
では、相模国ではどのような状況だったのでしょうか。

(1) 「消費地」相模

相模国内でも初期須恵器は確認されていますが、出土量は限られています。日本各地で群集墓への須恵器需要が高まった6世紀後半から徐々に出土量が増加し、7世紀からは横穴墓を中心に出土量が増加します。須恵器の供給が間に合わなかった器種（供膳具としての杯・椀・皿）は、土師器で代用していました。この状況は9世紀以降に南多摩古窯跡群からの供給が開始されるまで続きます。

古代相模は関東地方で唯一、須恵器生産が発達しなかった地域といえます。自国生産はほとんどせず、搬入品のみで需要を満たしていました。6～7世紀以降、武蔵国をはじめとした近隣諸国が須恵器生産を始めるなか、相模国はその潮流にはあまり参加しませんでした。

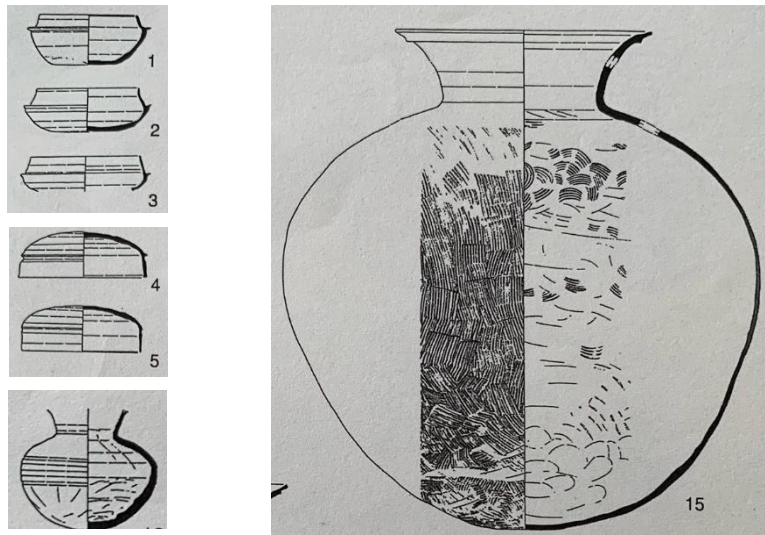
現在のところ、相模国内で須恵器窯として確認されている遺跡は一か所（横須賀市小矢部窯跡）のみであり、神奈川県という視点から見ても横浜市熊ヶ谷東窯跡を含めた2か所しか確認されていません。熊ヶ谷東窯跡は発掘調査が実施されており、6世紀～7世紀半ばまで運用されていたと考えられています。



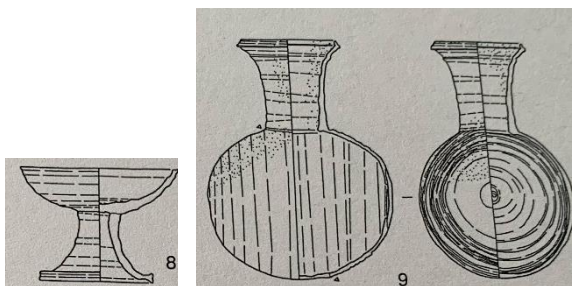
熊ヶ谷東窯跡の須恵器（酒井清治・伊藤博幸編 1995『須恵器集成図録』第4巻東日本編2）

(2) 供給元の傾向

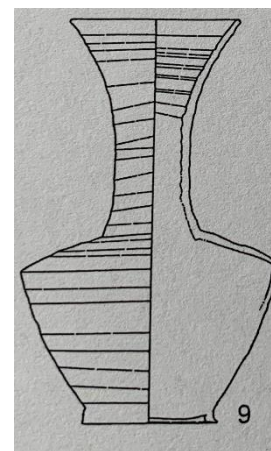
初期は大阪府陶邑窯跡群から須恵器が搬入されていましたが、東海地方で須恵器生産が本格化すると愛知県猿投窯跡群、静岡県湖西窯跡群から須恵器が搬入されていきました。これら以外にも岐阜県美濃須衛窯跡等から搬入されていたと考えられます。7～8世紀前半まで最も多量に相模国へ須恵器を供給していたのは湖西窯跡群であり、一般に「フラスコ型須恵器」と呼称される須恵器が代表的な例です。湖西窯跡群は海上ルートを通じて伊豆諸島から東北地方まで広く製品が流通しており、相模では横穴墓での出土が圧倒的多数を占めています。8世紀中頃からは南比企窯跡群や南多摩古窯跡群が供給元として移行していきました。9世紀には南多摩古窯跡群産の須恵器が圧倒的になります。



平塚市出土の初期段階須恵器（平塚市 1999『平塚市史』11）



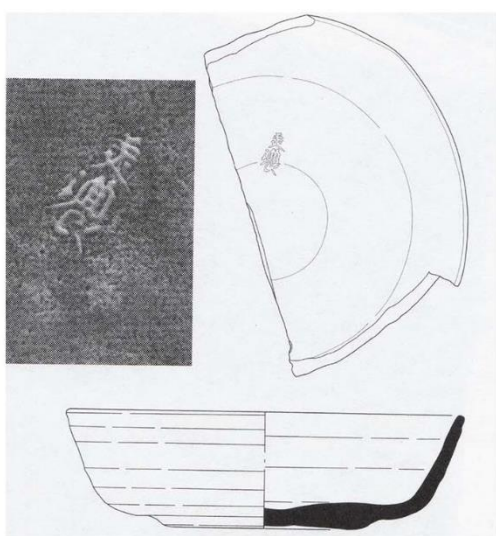
下尾崎横穴墓群 11 号墓（平塚市 1999『平塚市史』11）



万田八重窪横穴墓群 41 号墓（平塚市 1999『平塚市史』11）

4. 古代相模出土の特徴的な須恵器

相模国で出土した特徴的な須恵器として、「美濃刻印須恵器」が挙げられます。文字通り「美濃」又は「美濃国」と刻印された須恵器であり、岐阜県老洞窯跡群で生産されていた。国名が刻印された須恵器としては現状唯一とされ、生産窯での発掘調査も実施されています。岐阜県周辺や西日本を中心に出土しており、小田原市で杯 1 点の出土事例があります。これは生産地からみて最東端の出土事例になります。



小田原出土の美濃刻印須恵器

相模国内では主に東海地域（猿投窯・湖西窯）や武蔵国からの須恵器が多数搬入されていましたが、美濃国とも交流があったことを具体的に示す資料になります。

5. おわりに

須恵器の概説から古代相模での様相について説明してきましたが、今回の講座では三つの点を覚えていただければと思います。

- ① 須恵器は古墳時代の「新しい」焼き物
- ② 遺跡の年代推定の重要資料
- ③ 古代相模での須恵器はほぼ「搬入品」

古墳時代から平安時代までの墳墓や集落、官衙などの多数の遺跡の年代決定に大きな影響を与えているため、須恵器を知ることは歴史観を深めるきっかけになると思います。古代相模は生産窯が発展しなかった地域ですが、海や河川等の流通網が整っていたからこそ、生産窯を必要としなかったとも解釈できます。いずれにせよ、他の近隣諸国とは異なった須恵器需要の道をたどった地域だったのです。

【用語集】

①本講座で使用する用語

- 古代 原始時代と中世の間の時代で、日本史においては一般的に奈良・平安時代を指す。大和朝廷の時代を含める場合もある。
- 相模国 現在の神奈川県を占めた旧国名で、律令制下で東海道に属す。
- あな
窟窯 一般には「穴窯」だが、考古学上は「窟窯」を用いることが多い。

②考古学上で重要な用語

- 絶対年代 あるモノについての実年代のこと。作られた時期が明確なモノ（石碑、木簡、貨幣等）が指標となる。
- 相対年代 複数のモノ同士の「古い」「新しい」の時間的位置関係（年代的順序）のこと。
- 編年 日本では通常、土器等の時間的前後関係を配列すること、またはその配列自体を指す。モノの形や大きさ等の変化をもとに組み立てられる。